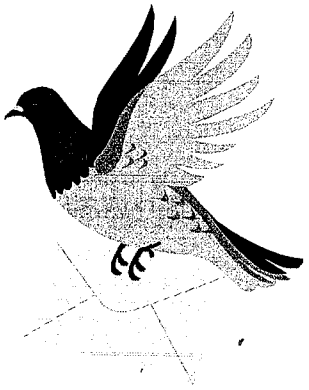
平成 30 年度 評価結果報告書



小平市立あおぞら福祉センター

（多機能型事業所）

株式会社日本生活介護

〔全体の評価講評：多機能型事業所〕　　平成30年度

《事業所名：小平市立あおぞら福祉センター》

No.	特に良いと思う点	
1	タイトル	利用者本位を軸に、体験を通じて利用者の好きなことを引き出したり、生活全般を視野に入れた機能訓練を実施している
	内容	経営理念である「市民の誰もが安心して暮らせる福祉のまち『こだいら』」の実現を目ざすことを使命としている当施設では、生活介護と自立訓練事業の多機能型施設として利用者本位を軸として選択制や自己決定の支援を展開している。生活介護利用者に対しては、体験を通じて自然と利用者が取り組み始めるよう働きかけている。例えば、墨絵や足浴など、利用者の「好きなこと」や「好きなもの」を引き出すことに注力した個別支援を展開している。自立訓練では、訓練だけにフォーカスするのでなく、生活全般の支援を視野に入れた外出訓練等も実施している。
2	タイトル	スポーツや地域貢献活動等をとおして障害者の理解や地域との交流を深めている
	内容	ボッチャ、卓球、ショートテニスなどを楽しみながら地域の人との交流や障害者への理解を深めている。ボランティアの受入や実習などの受入をしている。ボランティアは納涼祭、パラスポーツフェスタ、花ボランティアなどに受入れている。中学生の職場体験、教師の実習など定期的に受入れている。地域貢献としては、事業に支障がない範囲で会議室などの使用を認めることや障害者福祉関連の講座を開催している。さらに、地域の小中学校の経営協力委員となり、また、学校とのスポーツ交流や総合防災訓練などに参加して、地域との関係を深めている。
3	タイトル	利用者が楽しく過ごせるように職員間で目的意識を共有し、コミュニケーションや振り返りの場をもって連携を深めて支援に当たっている
	内容	利用者が多様な経験を積む中で、楽しく1日を過ごしてもらいたいという目的意識を職員間で共有している。職員間のコミュニケーションを重視して、毎日の帰りのミーティングの中では、利用者の様子について振り返りをしながら、楽しめていたか、もっとできることはないか等、支援の充実に向けた話し合いを行っている。理学療法士や言語聴覚士、歯科衛生士等との多職種の連携も深めて支援に活かしている。高齢化が進んでいる家族とのコミュニケーションにも注力しており、必要な家族支援の実施や利用者のグループホームへの移行などを手助けしている。
No.	さらなる改善が望まれる点	
1	タイトル	人事考課制度を導入しているが、さらなる改善が図られることに期待したい
	内容	施設では人事考課制度によって職員の育成が図られている。職員は一年間の取組みを「目標管理票」に記入して施設長に提出する。施設長はそれをもとに職員と面談し、育成に取り組んでいる。今回の職員自己評価の集計の中で、「事業所が求める職責または職務内容に応じた長期的な展望（キャリアパス）が職員にわかりやすく周知されているか」が低い回答になっており、また、育成計画に期待する記述が見られた。人事制度は法人の所管となっているが、職員の育成にキャリアパスが有効なものとされており、法人とも協議をして検討されることに期待したい。
2	タイトル	利用者の高齢化や広い施設内での死角などリスク要因を踏まえた、インシデントの報告・活用のさらなる充実に期待したい
	内容	施設では利用者の高齢化が進んでおり、転倒によるケガや服薬ミスなどの支援上のリスクが高まっている。また、広い施設内ではバルコニーなど利用者が自由に行き来できる場所がある反面で職員の死角が増えるという、利便性と相反するリスク要因もある。現在、服薬に関する事故などは少ない状況であるが、事故に至らないインシデント事例の報告や掘り下げた分析がさらに必要と推察される。今後のさらなる安全向上、事故防止のためにインシデント事例の積極的な収集、原因分析、予防対策の実施と効果の検証等をさらに充実させていくことが期待される。
3	タイトル	グループでバラツキの見られる記録のルール化を事業所全体の課題として取り組んでいくことに期待したい
	内容	個別支援計画に基づき利用者への支援を実践し、支援内容は計画作成・記録ソフトを活用しケース記録として残している。支援内容のモニタリングについては、これまでは担当の職員が毎月まとめていた経緯があるが、それを担当職員でなく、4つのグループ化を図って各クループ会議で検討する仕組みに変えた。しかし現状としては、モニタリング記録内容の全体での統一までにはいたっていない。連絡ノートのルール化をとりまとめた経験を活かし、事業所全体でモニタリング手法から記録方法をルール化して、全グループで統一していくことに期待したい。